〈研究ノート〉

「おびえる」から「おぶける」へ

仙波光明

【0】 筆者が子どもの頃、三十数年前には、いきなり背中をたたかれたり、突然蛇が目の前に現れたときなど、オブケタと言ったものだが、最近はオブケルは使わず、普通にはビックリスルを使っている。筆者の息子などは、時にビックッタなどと言っている。『現代日本語方言大辞典』では、徳島県に記録されているだけのこのオブケルも次第に聞かれなくなりつつあるようだ。

ところで、このオブケルをさかのぼるとオビエル（オビユ）にたどり着くと考えられているようだが、オビエルがどのような経路をたどってオブケルになったかは、まだ明らかではないように思う。オビエルからいきなりオブケルに変化したとは説明できないであろう。エルからケルへの変化が、いちばんの難点である。このオビエル（オビユ）からオブケルへの変化を考えてみようというのが、この小論である。

【1】 『日本言語地図』（第77図）で、オブケルとつながりそうな語の分布をおおまかに見ると、近畿地方を中心に広く分布するビックリスルの外側に、オブケル・オーケル・オビエル・オボケル等が分布する。その範囲は、さほど広くないが、オブケルは徳島県の吉野川流域と剣山麓一帯および広島県東部岡山寄りの地域に分布し、香川県中西部にはオーケルが見られる。島根県東部から島根県、そして岡山県北部にかけてのやや広い地域ではオビエル・オベルが使われている。さらに石川県能登半島の北部と山形県の海岸地方にはオボケルがあり、この間に佐渡のオボエルがある。『日本言語地図』では、この他にソボケル・オブレル・ソブレル・オボエル・オビレルが確認できる。

この範囲で、オビエル（またはオビユ）からオブケルへの経路を描くと、「オビエル（オベル）→オビレル→オブレル→オブケル」のようになるであろうが、最後の段階にやはりすっきりしないものが残るのである。

【2】 次に『日本方言大辞典』を見てみると、『日本言語地図』に示された他にもオブケルが使われた地域のあることが分かる。それは、淡路島、愛媛県東部、岡山県小田郡および広島県比婆郡である。このうち、広島県比婆郡にはオビケルという形もあったことに注意しておきたい。（オビケルは岡山県阿哲郡にも記録がある。）

実は、徳島方言でもオビケルが存在したことを示す資料があるのである。徳島大学図書館の泉山文庫の中にある『阿波けんど』と題する方言集の草稿がそれである。この『阿波けんど』[注]によって、明治三十年代の徳島でもオビケルと言うところがあったことが分かる。

以上のことから、オブケルはオビケルから変化した形ではな

いかと考えられよう。そして、オビエルの南の地域にオビケルが分布するところから、オビエル ↓ オビケルを考えたいところだが、単純にそう決められるだろうか。オビエルはしばしば、オンビェルあるいはオッビェルと発音されたのではないかと思われるからである。これらの形があってオベルが生まれるのだと言えよう。

注…この資料的価値は森重幸が明らかにしている。

【3】 ここで、オビエルからオビケルへの直線的な変化をたどるのを止めて、別の可能性を検討してみようと思う。その手がかりを与えてくれそうなのが『日葡辞書』に見られるオビカスという語である。『邦訳日葡辞書』（または『時代別国語大辞典 室町編I』）に次のように示されている。

Vobicaxi, su, ita.（ヲビカシ、ス、イタ）。城を包囲している人々が、城中の者を動揺させるためにするように、大声や喊声をあげて、人を驚かす。

このオビカスは他動詞であるが、これに対する自動詞としてオビケルが考えられるであろう。この類例として、負かす／負ける、ふやかす／ふやける、ぼやかす／ぼやける、とろかす／とろける、などを挙げることができる。

すなわち、オビケルは他動詞形のオビカスがあって生まれたと考えられるのである。

【4】 さて、オビカス ↓ オビケルを認めることができれば、オビエルからオブケルへの経路を比較的簡単に描くことができるのではないだろうか。その経路は次のようなものである。オビエルに対する他動詞オビヤカスがある。このオビヤカスからオビカスが生まれた。このオビカスの自動詞形としてオビケルが誕生し、オブケルに変化したのである。オブケルに対する他動詞としてはオブカスがある。

【5】 終わりに、オビユ・オビエル系列の変化を考えてみよう。（a）オビユに対する他動詞として、古くオビヤスがある。自動詞の系列は、まず（b1）オビユルがあり、少し遅れて（c1）オビエルが出てくる。このオビユルから（b2）オビルとなり（b3）オベルにつながるであろう。そして（b4）オッベルとオンベルが生まれ、オッベルはさらにオッペルになった。なお、このオベルはオビエルからの変化かも知れない。その場合、オビエル ↓ オッベル（オッビェル）／オンベル（オンビェル）

↓ オベルを想定する方が妥当かも知れない。次に（c1）オビエルは他動詞形オビヤカス・オビカスを経由する形で、（c2）オビケルにつながり、さらに（c3）オブケル、（c4）オボケルや（c5）オーケルへと変化しただろう。また、（c′1）オビエルからは、（c′2）オビレルも生まれ、これが（c′3）オブレルや（c′4）オボレルにつながるのではないだろうか。

実際の分布状況を見ると、オビエル系の語が上述のような経路で変化したと見るべきではないかも知れない。しかし、オビエルからオブケルへの変化が、他動詞形を考慮することで、比較的無理なく説明できることは確かだと思われる。

（せんば・みつあき 総合科学部助教授）